■ 研究論文

国立公園の成立期における田村剛の示す「風景」概念と用法

The “Landscape” Concept Defined By Tsuyoshi Tamura in the beginning of the National Parks

水内 佑輔* 古谷 勝則**

Yusuke MIZUUCHI Katsunori FURUYA

Abstract : In 1931 a system of National Parks has been established for the purpose of protection and usage of natural landscape. While “fuukei / landscape” is the subject of this system, its concept and definition has been a subject of discussion due to some confusion with synonyms like “keikan / landscape”. In this study, the focus has been set to the landscape concept defined by Tsuyoshi Tamura in the beginning of the National Parks. As a result of this study, three points have been identified: 1) “fuukei” and “keikan” were not used with clear distinctions through 1910’s to early the 1930’s, which time frame had been set as this study subject; and 2) there were some usages with the word “fuukei” and “keikan” based on Tamura’s definition. In addition, Tamura has put much emphasis on “scene from a specific view point with a sense of evaluation” as a concept of landscape. National Parks have established by this Tamura’s landscape concept. 3) After 1935 Tamura has used with clear distinctions with “fuukei” and “keikan” and that concept is different clearly.

Keywords : national parks, landscape, Tamura Tsuyoshi

キーワード : 国立公園, 風景, 田村剛

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

国立公園は「我が国の風景を代表するに足りる傑出した自然の風景地（海域の景観地を含む…後略）」と自然公園法に定義され、また近年の国立公園行政において強調されるように、（なんらかの物理的実在ではなく）、その対象とするものは人間の知覚によって生じる現象としての「風景」¹⁾または「景観」²⁾であるとされる。

国立公園行政上では「風景」や「景観」という用語は同義語として使用されていると考えられるが、これらの用語に関する混乱が生じているとの指摘も存在する。その要因として、これらの用語が関係諸分野で様々な解釈がなされ、その用法や解釈をめぐる混乱³⁾が存在していることが考えられる。

小野⁴⁾による学術用語と行政制度上におけるこれらの用語の見取りによれば、「景観」の概念が複雑化することが示されるが、簡単にこれらの用語を巡る状況を整理したい。

地理学や生態学などでは「景観」は物理的な実在するものとして捉えられ、自然、人為、あるいはその相互作用によって構成される「空間」を示し、土地の特徴を科学的、客観的に理解するための用語として用いられてきた⁵⁾。

また、地理学においては、文化論的転回以降の、新しい文化地理学の枠組みの中で、「風景」を表象として捉え、どのようにその表象が生産されるのかという観点から議論がなされている。特に近代における権力、アイデンティティ、階級、ジェンダー、文化といったような社会の諸関係の中から、「風景」が生成される構造に着目し、その背後の関係が論じられている⁶⁾。この新しい文化地理学の枠組みの中で、日本においては、従来の伝統的な地理学の枠組みにおける「景観」とは区別するという観点から「風景」という用語が使われる場合がある⁷⁾。

このほかに、「風景」や「景観」を操作対象とする学問である造園学をはじめ建築学や土木工学、土木工学から派生した景観工学などにおいては、現実の物理的なものと、それを知覚（主に視

覚による）する人間主体による相互関係の中に生まれる現象であり、表象として捉えられている。

特に「風景」や「景観」が生産するある種の美に着目し、それらが生産される物理的、あるいは心理的システムにアプローチを行うといった特徴を持つ。これらを理解するモデルとして、視点と視対象の関係が重視されるといった特徴を持ち、その視点の主体である人間の背景の知覚システムが重視される⁸⁾。用語としては「風景」「景観」が混在しているが、一般的傾向として、より心象を重視する立場においては「風景」が、より物理的実在が重視される場合には「景観」が使われる場合が多い⁹⁾。

このように大きく分ければ、物理的実在を示す場合と、その知覚によって生じる現象を示す場合の2つがあり、特に「景観」が両義的に使われる傾向にあることが指摘される。

こういった用語に関する混乱に加えて、国立公園行政において、「風景／景観」を扱う上で生じる混乱があると考えられる。国立公園は、現象としての「風景」をどのように実際の地域に反映させるのかという課題を本質的に含んでおり¹⁰⁾、必然的に制度として、主体に属する現象である「風景」の優劣をいかに客観的に取り扱うかという点にあると考えられる。

さらに、「景観」が持つ両義性が、国立公園の対象としての「風景」や「景観」を巡った混乱を生じさせているとされる。小野によれば、国立公園行政が進められる中で、風景の評価を行う際に、地域的実在である景観概念が有効とされ、その中で「景観」という用語が、現象としての「風景／景観」を含んだ両義的な性格をもつものとして制度上に扱われたとする。その一方で、国立公園行政の実態としては、生態（地理）学的景観へ傾いており、「景観」という用語の両義性の中に、法の目的と実態のズレが埋没しているという現状が指摘される。

このような「風景」や「景観」をめぐる混乱は解消されるべきであるが、そのための概念の整理や用語の統一は基本的に必要な作業であると考えられる。

*千葉大学大学院園芸学研究科／日本学術振興会特別研究員 **千葉大学大学院園芸学研究科

表－１ 初期の国立公園の選出方法とそれに言及する研究

	選定	区域決定
物理的実在 (景観概念)	西田(2012) 岡野(2013)	
現象 (風景概念)	小野(2008)	堀(1995), 西田(1997) 小野(2008), 小野(2010)

そこで、本稿では国立公園行政で使用される「風景」や「景観」といった用語の概念を明らかにするために、国立公園の父とも言われる造園学者・田村剛が使用する「風景」や「景観」といった用語の用法や概念の検討を試みる。

また、本稿の問題意識は、現象としての風景をいかに制度として評価するのかという点にあるが、1930年代の最初の国立公園指定の際にどういった評価を行ったかに関してをもう1つの検討課題としたい。

国立公園の指定は、国土からおおよその場所を決定する「選定」の作業を行い、次に、実際に境界線を決定する「区域決定」の作業を行うことによって決定される手順となっている。

この「選定」に関して、西田は¹¹⁾「地形地質、地被、自然現象、野生動物等の景観評価」によって行われたと指摘し、岡野¹²⁾も同様に、「風景型式」を用いて自然科学的視点、即ち物理的実在である「景観」概念により行われたと指摘する。これに対して、小野⁴⁾は現象としての風景を基準としたとしている。

一方で、「区域決定」の際には、現象としての「風景」によって、公園の区域が決定されたことが、堀¹³⁾や西田¹⁴⁾、小野⁴⁾、小野¹⁵⁾によって指摘されている。このように、既往研究においては国立公園の指定の基準となった価値基準に関しては若干の齟齬を見せる¹⁶⁾(表－1)。

このことから、初期の国立公園は、物理的実在として、客観的／科学的な評価による優劣により選出されていたのか、それとも主体に属する現象としての風景に対して、何らかの方法によって優劣をつけたのかを検討する必要があり、この点を併せて本稿の検討課題とする。

(2) 既往研究のレビュー

こういった「風景」や「景観」などの用語に関する混乱を背景に、小野¹⁷⁾は、日本に「景観」といった用語を導入した三好学の意図と、国立公園とも関連している史蹟名勝天然記念物への影響を考察している。この研究によれば、「景観」という用語は1902年に三好の論考に現れたのが初出であり、科学的な観察と美的評価の双方を意図していること。また一定領域を占める植物の集団を指すだけでなく、眺めという主体と対象の関係を示す両義的な用語であること。そして、その数年後には中学国語教科書を通じて眺めの意味を持つ一般的な言語として社会に紹介されていたことが明らかにされている。

黒田ら¹⁸⁾は史蹟名勝天然記念物法制定における「風景」概念とその変遷を考察している。しかし、これらの研究では国立公園そのものの影響に関しては触れられていない。

田村剛に関しては、国立公園史上で議論がなされ、田中¹⁹⁾、堀²⁰⁾、依²¹⁾、西田²²⁾、小野²³⁾、村串²⁴⁾、水内ら²⁵⁾による研究がなされており、1930年代の国立公園の指定に田村が深く関わったとされている²⁶⁾。また、庭園²⁷⁾、森林美学²⁸⁾、風景・公園計画²⁹⁾、³⁰⁾に関して田村に着目した研究がなされているが、これらの研究では田村の風景評価に関しては論じられるものの、その「風景」概念に関しては問題とされていない³¹⁾。

とはいえ、糸賀に「景観」研究と造園学研究は不可分であると指摘³²⁾されるように、国立公園だけでなく、造園学の根幹にかかわる部分であり、こういった「風景」に関する議論は不可避であると考えられる。

(3) 研究方法

上述したように、「風景」や「景観」は多様な意味を持ち、それぞれ重なりあう部分も存在する。本稿では田村剛の風景概念及びその用語の用法を、即ち田村がどのように「風景」を理解していたかを、田村や造園学周辺の状況と併せて考察した。

まず、田村剛の著作や論考を可能な限り収集し、その中に現れる風景概念とその用法の整理を行うこととした。

本稿では第一次の国立公園指定が完了した1936年を1つの目安と考え、合計281稿を可能な限り収集した。その田村の論考³³⁾から「風景」や「景観」及びその類義語を抽出し³⁴⁾(表－5に示す)、それらの各用語がどのような意図をもって使用されたのかを分析した。その際に、田村の周囲の状況を併せて考察することが、より妥当な田村の意図の解釈を導き、その蓋然性を高めると考えた。

また、田村の言説は周囲の状況と独立しているわけではなく、それらは相互に影響し合っている。とすれば、その相互関係を追う必要があるだろう。

2. 田村剛の「風景」及びその類義語の抽出

収集した281稿の田村の論考を概観し「風景」という用語を抽出した。前後の文脈からその用法を類推したところ、複数の意図を持って「風景」という用語が使用されていることが確認された。

まず、「風景」という用語は「自然」あるいは「山水」といった語と同様に捉えられており³⁵⁾、³⁶⁾、基本的に原生自然空間から農村あたりの人工物の影響の少ない空間や自然物に対して使用されている。また、「自然風景」「天然風景」といったように、自然を示す語が「風景」の前に付加され、その使用対象を明確に示す場合もあるが、「風景」のみが単体で使用される場合においても、同様に自然空間を示している。このように、基本的に田村の示す風景の領域は自然空間や自然物に限定されている³⁷⁾。

さて、その自然空間(物)に限定される「風景」という用語であるが、2種類の用法が確認された。それは美的評価のような、何らかの評価の有無である。この場合「風景美」「好風景」といった用語のように、評価を示す語と組み合わせられる場合もあるが、「風景」という語のみでなんらかの評価を示す場合もある。また、これらを指し示す際には、全て「風景」という用語が使用されていたわけではなく、「風致」「景」「景観」「美観」「観」「地貌」「景色」「壮観」「大観」「風光」「光景」「風趣」「景勝」「景趣」「風貌」「勝景」「風情」の使用が確認された。

これらの用語が使用された論考数を集計し、上位の5つの用語を表－2、図－1に示した³⁸⁾。281稿中「風景」は181稿で使用されており、最も多くの論考で使用されていた語であることが確認された。また、1922年を除き、基本的にどの年代においても最も多く使用される用語となっている。その次には「風致」が59稿に現れているが、「風景」の3分の1以下にとどまる。また、「景観」に関しては41稿であり、「風景」と比較した場合には非常に少ないものとなっている。とはいえ、その初出は1917年であり、初期の頃より使用が確認出来る³⁹⁾。次に、「風景」をはじめとするこれらの用語がどのような意味をもって使用されたかを、田村を取り巻く状況を踏まえて考察していく。

3. 1910年代の田村剛の風景概念

(1) 1910年代の田村剛を取り巻く社会状況

1910年代は造園学の勃興期ともいえる時期である。わが国の近代都市公園の嚆矢として知られる日比谷公園はその大枠を林学者の本多静六によって設計されているが、田村は本多の東京帝国大学農科大学造林学教室にて造園学を志した。その後、1915年に卒業、大学院に進み、明治神宮造営に携わる。こういった公共

表－２ 年代ごとの各用語が使用された論考数

年代	1916	1917	1918	1919	1920	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	1931	1932	1933	1934	1935	1936	1937	1938	1939	合計
風景	2	6	5	11	10	5	2	4	4	12	14	4	7	13	15	9	9	4	11	11	12	5	3	3	181
風致	2	4	0	1	4	1	5	0	2	3	6	2	4	3	2	0	3	1	6	3	5	1	0	1	59
景	1	4	3	4	3	2	1	1	2	5	3	0	3	2	3	1	4	1	3	0	2	1	0	1	50
景観	0	2	1	2	0	2	1	0	0	1	2	0	3	1	3	2	4	1	5	2	5	2	1	1	41
美観	2	5	0	3	0	2	3	1	1	1	1	0	3	1	5	1	1	3	2	0	2	3	1	0	41
論考合計	6	7	7	17	23	10	8	5	7	18	16	7	7	15	23	16	14	9	14	16	17	12	4	3	281

図－１ 年代ごとの各用語が使用された論考数の累積グラフ

造園空間の出現に伴い、それを扱う専門性を学問として成立せよとした時期であった。

田村もその一端を担い、1916年の『林業芸術論』⁴⁰⁾を皮切りとして造園に関する論考を発表し始める。そして、それらのいくつかの論考をまとめ、わが国初の造園学の体系書として『造園概論』が出版された。本多による序文には

「我邦に於て未だ曾て厳肅なる学術的研究によってなされたる造園学……予は敢て造園学と言ふ……の著書をみたことがない」と書かれており、また本文中においても造園“術”，造園“学”といった用語が意図的に使い分けられるなど、造園の学問として成立を目指す田村の企図と社会的状況が想定される。

この『造園概論』における、造園の定義は「植物・動物・岩石・泉水等自然材料と亭榭・彫刻・橋梁・道路等の建設物とを材料として、一定の位置と面積との上に理想化された風景と建築的構造を創作する術」とされるように、風景が美的に操作される対象として位置づけられる。

（２）1910年代の田村剛の風景概念と用語

また、この『造園概論』では田村の風景とその評価への基本的理解が示される。

田村は、風景を特定の地点（視点）⁴²⁾から対象を眺めた時に生じる視覚像として理解しており、それは以下の文に示される。「元来風景には輪郭がない。然し吾人が風景に向ふ時は、そこに輪郭が出来、中心を生じ、そして遠近高低や前後左右根別が始まるのである。であるから風景は之に対する吾人の立つ位置によって如何様にも変化するのである…中略…風景を観照するためには、その中心点を選び、前景・背景等の要素を選定し、そしてそれ等のものを一つの輪郭内に収めるのである。」⁴¹⁾（図－２参考）

加えて、エマーソンの記述を引用翻訳した以下の文に示されるように、そういった風景を知覚する主体によって、風景の評価に差異が生まれることを示していることである。

「風景と風景との相違は極めて小さなものであるが、これを眺め

図－２ 『造園概論』での田村の風景概念

る人の相違は実に甚だしいものがある。凡そ如何なる風景も、見様によれば必ず美はしいといふことは、実に不思議なほどである」⁴²⁾ このように、物理的実在そのものではなく、特定の視点から対象を眺めた時に生じる視覚像が、田村の風景の基本的な理解であり、その物理的実在を知覚する主体による風景の見方や、風景を見る場所（視点）によって、風景そのものや風景の評価が変化することが示される。

この特定の視点から対象を眺めた時に生じる視覚像は、現在の景観工学による分類である「シーン景観」に相当するものであると考えられるが⁴³⁾、こういった例のみに「風景」という用語が使用されているわけではなく、「その国土全体を統一ある風景として」⁴⁴⁾とあるように、景観工学による「場の景観」に相当するような使用のされ方もしている。また、「風景として高低があるでもなく」⁴⁵⁾のように物理的実在そのものを示すであろう用例も確認される。

加えて、1910年代においては、これらを示す語は「風景」だけでなく、「景」「美観」「風致」「景観」「景色」「勝景」「大観」「風

表－３ 1910年代に使用された用語と論考数

風景	景	美観	風致	景観	景色	勝景	大観	風光	観	壮観	光景	風趣	景趣	論稿
24	12	10	7	5	5	3	2	2	1	1	1	1	1	37

光」「観」「壮観」「光景」「風趣」「景趣」といった用語が使用されている。とはいえ、37 稿中、22 稿で「風景」が使用されており最頻出の用語である。これらの用語の使い分け、特に「景観」との差異に着目したが、「景観」に関しては、7 例の使用⁴⁶⁾に留まっており、その用例に特徴は見出すことは難しい。

(3) 風景の評価と造園

さて、田村は風景の知覚主体によって、風景認識・評価の差異が生まれることを示していたが、必然的に、問題としたいのは、その風景の評価基準である。同じく『造園概論』には「自然風景美を徹底的に味ふといふには、非常な修養がなくてはならぬ…中略…吾人は吾人の美的修養に達し得る程度に応じた風景美を味ふことしか出来ない」⁴⁷⁾

と示されるように、その差異の要因の最たるものは、風景を知覚する能力・教養であるとする。そして、「風景を正しく観照すること」⁴⁸⁾と示されるように、それぞれの風景ごとに絶対的に正しい見方が存在することを自明のこととする。この、正しさに対して「美」「実用」「真(科学的評価)」が必要かつ、それらを調和させる専門的職能が必要であり、それを造園であると主張する。

このように、風景を知覚する主体によって、その認識・評価に差異があることは認めつつも、「正しい風景」の体験の仕方が存在しており、それは造園(学)によって、査定可能なものであると認識していた。

そして、「吾人は先づ風景に対する立点を決定せねばならぬ」⁴⁹⁾とするように、視点と対象の関係の操作、すなわち対象となる物理的実在とそれらを見る場所の関係や、「風景にしても、此の海岸にかういふ島が一つあつて欲しいとか、此の樹の枝が今少し横に延びて居たらば…」⁵⁰⁾に示されるように、対象そのものへの操作を行い、理想的な風景を創出する必要を示す。

このように美的に扱われるべき風景や造園空間に対して、農学では「美」が不足しており、美学においては「実用」が不足しており、建築学においては植物など自然に対する「真」が不足し、既往の学問では対応不可能であるとし。市民の公衆衛生の為にはそれらを満たす空間の創出が必要であり、その創出の担い手の専門性を確保する必要性を主張している⁵¹⁾。

(4) 小括

1910 年代における田村の風景の基本概念は、風景認識主体が、物理的実在を知覚した際に生じる美的現象として捉えており、特定の視点から対象を眺めた時に生じる視覚像が、風景に対する基本的理解であった。また、風景の評価主体の違いによる、風景評価の差異を認めつつも、その差異の要因には能力であると認識していた。つまり、「正しい風景」の体験の仕方が存在することを前提に、風景を認識・評価する能力によって、その差異は生まれるものとしておいた。同時に、能力であるからこそ、学問として扱うことが可能であり、そしてその学問「造園学」を構築することを企図していた。また、1910 年代においては、他分野との差異化を図り、造園の学問としての成立を主張するための 1 つの根拠として、風景を主体と対象に生じる現象として、美的な取扱い対象として位置づけたと考える。

4. 1920 年代の田村剛の国立公園構想と風景概念

(1) 国立公園法制定へ向けた衛生局嘱託としての田村剛

1920 年代は公共造園空間が制度として整備される仕組みが整っていく時代ともいえるが、田村も公園制度の整備のため⁵²⁾、1920 年 8 月内務省嘱託に任命される。そして、1930 年代の国立公園の成立へ向けて深く関与するが、そこに向かう田村及びその周辺状況をみていきたい。

田村は明治 6 年太政官布達第 16 号を根拠として公園が府県のみによって整備される状況に対して、公園の規模や目的に応じて、

適正な行政セクションによる公園の整備を目指す。その一環として、自然風景地の国立公園化を目指す中で、1921 年 6 月の上高地を皮切りとして、国立公園に相応しい空間の調査を行う。これらは最終的に 16 ヶ所の調査がなされている。後に、国立公園候補地とされるこの 16 調査地に加え、国立公園に関するいくつかの論考を発表し、国立公園として相応しい場所を提示している。

しかしながら、後の国立公園が日本を代表する風景を対象とし、風景の質が指定の最重要条件であったのに対して、この時点での田村の国立公園像では、自然レクリエーション空間を国家が公園化することが重視されていた⁵³⁾。このため、風景に対する評価においても、利用の観点が重視されており、16 調査地をはじめとする国立公園に相応しい空間のリストアップにおいても、日本を代表する風景といったような、風景の質そのものが場所を決定づける重要な条件とはされていなかった。

この田村の構想をもとに、内務省衛生局では国立公園に関する調査が行われる。また、これと並行して、天然記念物や名勝の延長線上として捉えた国立公園の概念をもとに内務省官房地理課や史蹟名勝天然記念物調査会において、国立公園に関する検討がなされていた。

この両者を中心に様々な論点から国立公園を巡り論争が繰り広げられるが、本稿には、主に上原敬二による批判が深く関わる。上原は、国立公園に相応しい風景の評価手法や、その調査が経験の浅い造園(林)学者の数人のみで行われている点⁵⁴⁾や、田村が海外の National Park を実際に見たことが無い点指摘する^{55)、56)}。

これらの批判もあり、田村もアメリカをはじめ海外の国立公園事情の視察の必要性を痛感し、衛生局嘱託を辞し 1923 年より海外視察を行う。しかし、その間に関東大震災が起こるなど経済状況が悪化し、衛生局の中でも国立公園に対して消極的となり、1925 年度には国立公園調査は未完のまま打ち切りとなる。

そうした中で、1927 年には尾瀬などでの発電計画が起こるなど風景が実際に破壊の危機に瀕する。その一方で、経済審議会での外貨獲得のための観光地整備の提言や、新聞社による日本新八景など⁵⁷⁾、保護と利用の両面で国立公園の必要性が高まっていき、7 月には田村は再び衛生局嘱託に任命された。

田村は海外での調査後に国立公園に対する考えを改め、その成果をもとに 1927 年に『国立公園』⁵⁸⁾を発表し、新たな国立公園像を提示していく。その中で田村は国立公園の目的を変化させ、一定区域の風景を永遠に保存し、その利用を行うことと定義し、風景の保護と利用の双方を国立公園の主目的に据える。そして、その国立公園の対象となる風景は原始的な全く人の手の加わっていない原生的風景であり、同時に日本を代表するものであると規定する。ここにおいて、風景の質が国立公園の最重要条件へと位置づけられる。

1927 年 12 月 6 日には官民合同の国立公園協会が設立、1930 年 1 月 14 日の閣議決定に基づく国立公園調査会が設置されるなど国立公園法の実現が近づく。7 月 11 日の第一回国立公園調査会では、「国立公園ノ制度ニ関スル特別委員会」、「国立公園ノ選定ニ関スル特別委員会」の設置が決定された⁵⁹⁾。田村も国立公園調査会幹事として国立公園の創出に関わっていく。

このように、1920 年の衛生局嘱託任命以降、田村は国立公園行政に携わり、16 調査地の調査などを行うものの、この時点では風景の質が国立公園の選出の条件とはなっていないために、風景の質の評価そのものが明確に必要とされる状況ではなかった。しかし、1923-4 年の海外視察からの帰国後、国立公園像を変化させ、このために国立公園の成立のために風景の評価が必要となる。

(2) 1920 年代の造園学と田村剛

以上の様に、田村は内務省衛生局嘱託として、あるいは造園学者として国立公園の実現を目指した。

1924年には上原敬二や井下清が中心となり造園を専門とする東京高等造園学校が創設され、上原は体系書として『造園学汎論』⁶⁰⁾を出版する。1926年には理想的な造園空間とされる明治神宮外苑が完成するなど、造園空間、法制度、担い手の養成が進むなど、造園の学問的構築が飛躍的に進んでいく。田村自身も、『大日本山林會報』や『庭園』などを中心に、国立公園だけでなく造園学関連の多数の論考を発表する。また、1925年には新たな体系書として『造園学概論』を出版している。

しかしながら、天然公園や国立公園、郷土風景や風景計画への記述は見られるものの、造園学の体系書でありながらも風景概念に関する記述は見られない⁶¹⁾。

また、『造園学概論』に限らず、数多くある他の論考においても風景概念に関するものは見られず、1929年の『森林風景計画』においてようやく“風景”概念に関する記述が確認出来る。

(3)『森林風景計画』における風景概念と風景型式

この森林風景計画においても、「風景の構図上大切なものとなる」とあるように⁶²⁾、田村の風景理解は従前からの視点と対象の関係を引き継いで視主体の知覚を重視し、視主体の経験をはじめとする背景が風景評価に影響することを示す。しかし、このような個人的趣味性による影響を認めつつも、「批評する人の趣味的教養の深さが違つてゐるために、風景を十分に鑑賞する能力のある人とさうでない人とで、批評の異なる場合が多いのである。つまり風景の美は、これを観照する人の鑑賞能力に応じて、それだけの美はしさが発見せられるといふことなのである。」または、「風景そのものに美はしさの階段があるよりも以上に、これを眺める人の鑑賞能力の階級の方が、大きいといふことをも記憶して置きたい。」⁶³⁾とあるように、風景認識主体の能力を最重要視し、造園家にその能力を高めることを求めているように、従前からの風景の理解に変化は見られない。また、主体の移動によって生まれる視点や時間、天候による変化などによる風景の変化を示し、その点に美的対象物としての風景の特質を論じている。

しかし、従前とは異なった点として、風景を地理、地質、植生などの特性ごとに分類し、定性的に記述を行う風景型式に関する記述がなされる。その代表例として「田園型、都会型、平原型、海岸型、湖沼型、高山型、森林型、雪嶺型、氷河型」を紹介し、特に「森林の型」について詳しい記述がなされる。この風景型式に関して、油井⁶⁴⁾は渡辺十千郎の『風景の科学』による影響があると推論しているが、1925年よりその「型」に関する記述⁶⁵⁾が確認されており、『国立公園』⁶⁶⁾や『尾瀬の風景』⁶⁷⁾においてもその萌芽は確認されている。

しかし、この「風景の型」は、当時の地理学で主流であった景觀概念とは異なり、人間主体の視覚像が重視されている様子が確認される。

例えば、田村は森林の型を原生林型、天然林型、人工林型に分類するが、「天然林型とは、天然生及び稀に人為によつて成立したものであつても、凡て外観上人工の加はつた跡の認められないものをいふのである。」とされ、その型は視覚による分類がなされている。

また、「風景の主要材料としては地形、岩石、水、植物、動物、人工物の如く、地象美に属するものがあり」と記述され、参考図として、「湖水・森林・瀑布・山岳・氷河等地象美の粋を集めた目まぐるしい風景」としてキアナデアン・ロツキーのオハラ湖が紹介されているが(図-3⁶⁸⁾)、この文脈での「風景」という用語は、“特定の視点を持つ視覚像”であることが類推される。以上のように、田村の“風景”概念や風景型式においては視覚が重視されている。

図-3 キアナデアン・ロツキーのオハラ湖

(4)用語の使い分け(-1929)

こういった“風景”概念に対して、1929年までの「風景」と「景觀」といった用語の使い分けに関して着目したところ、風景が使用されていた論考が99稿、景觀が15稿であった(153稿中、図-1参考)。しかし、この2語の用法に明確な違いは見いだせない。例えば、『尾瀬の風景』⁶⁹⁾において「尾瀬沼の風景の特徴」の記述の際には、「次に湖沼風景を左右する最も大切な条件…中略…更に湖沼景觀を司配する重要条件たる…」のようにほぼ同義語として「風景」と「景觀」が使用されている。

一方で、植物対して「景觀」が使用される例が少なからず確認される^{70)~73)}が、それは植物群落の相観というよりも、植物の見かけに対する眺めに相当するものであり、特に以下の記述に顕著である。「他人の家の周囲に特徴ある景觀を示す樹種としては、桐がある」⁷⁴⁾。尤も、「景觀」の使用例は植物に留まらず、「アルプス的景觀」や「岩ばい景觀」などの用例もあり、また「林間からの眺望」に関する記述の中で、「小さく区画しておけば、所々で若い林が現はれて、眺望を与えてくれることになるわけである。従つてこ々にも亦、林内の景觀を良くするためには…」⁷⁵⁾のように眺めそのものを指す用例も確認出来る。

このように1930年代以前の田村の「景觀」は、地理学的手法ではなく、眺めという主体と対象の関係の双方を示すものが確認され、「風景」との明確な使い分けは見られない。

上述の『尾瀬の風景』は東京営林局からの嘱託調査の結果を武田久吉とともに著した『仙境 尾瀬の景觀』に収録されているものである。この編集過程がどのように行われたかは不明であるが、書籍の主題には「景觀」が使用され、また武田久吉による論考の主題も『尾瀬の景觀』とされている。しかし、そういった状況においても田村は「風景」を使用しており、田村の中では「景觀」ではなく、「風景」を優先して使用されていることが確認出来る。

(4)小括

田村は1920年より衛生局嘱託に任命され、いくつかの候補地を選出し、調査を行っていく。1920年代初期の田村の国立公園像においては、風景の質そのものが国立公園の選出に直結していたわけではなく、この時点では風景の評価は差し迫った問題とはなっていなかった。しかし、上原らの批判後に行った海外視察の後に、国立公園像を変化させたことに伴い、風景の質そのものが国立公園を選出する最重要条件へと変化した。

田村の風景への理解は1910年代とは基本的には変化しておらず、風景認識主体が、物理的実在を知覚した際に生じる美的現象として捉えており、特定の視点から対象を眺めた時に生じる視覚像が風景に対する基本的理解であった。また、風景の評価の差異に関しても、依然として能力によるものであると認識していた。これに加えて、「風景型式」として、地理、地質、植生などの特性ごとに風景を分類する手法が考案されている。しかし、これは物理的実在に対する地理学のアプローチとは異なり、分類の対象とな

る風景は、主体が対象を眺めた時に生じる視覚像である。また、「風景」や「景観」の用語の使い分けに関しては確認出来ない。

5. 1930年代の田村剛の風景概念と国立公園の選定

(1) 国立公園法制定と各国立公園指定への経緯

1931年4月1日に国立公園法が制定され、1934年3月16日に霧島、雲仙、瀬戸内海が日本初の国立公園として指定されるが、1930年代の田村及びその周辺状況を見ていきたい。

(i) 国立公園調査会(1930年1月-1931年10月)

国立公園調査会は、国立公園法による国立公園委員会の組織までの暫定組織として位置付けられていた。この調査会内に、「国立公園ノ選定ニ関スル特別委員会」が設置され⁷⁶⁾、1931年9月19日の第三回国立公園調査会総会において、「国立公園選定ニ関スル方針」が議決された。田村はこの「国立公園ノ選定ニ関スル特別委員会」には幹事として参加しており、後の田村の記述⁷⁷⁾からみても議論が紛糾⁷⁸⁾することなく、田村の主導により「国立公園ノ選定ニ関スル方針」決定されたと考えられる⁷⁹⁾。

(ii) 国立公園委員会(1931年10月-1941年3月)

1931年10月1日の国立公園法公布と同日に国立公園委員会が任命され、11月24日に第一回国立公園委員会が開催された。この国立公園委員会の中で、「国立公園ノ選定ニ関スル方針」を基本として、各国立公園を選定するために「国立公園選定ニ関スル特別委員会」(以下、選定委員会)が設置された。この選定委員会では、基本的には「国立公園選定ニ関スル方針」に従って、国立公園の選出の作業が行われている。

この国立公園の選定に関する議論は紛糾し、最終決定までに時間がかかったことが伝えられているが、田村は必要条件である各候補地の風景に対して、「風景型式」などによる順位付けを行い、議論の基礎知見を提供した。そして、合意形成は難航したものの、最終的に12か所が正式候補地として選出されることが、1932年10月8日の国立公園委員会で発表された。この後「区域決定ニ関スル特別委員会」によって「区域決定」が行われ、順次国立公園として指定されていく。

本稿の検討課題の1つに、この際の評価の基準があるが、その前にこの前後の田村の言説から、田村の風景概念を整理したい。

(2) 1930年以降の田村剛の風景概念と用語

この特別委員会の議論期である⁸⁰⁾1932年に田村は科学画法叢書11編の『風景の驚異』においていくつかの論考を著している。その中に収められている『風景概観』⁸¹⁾における以下の記述が管見における「風景」という用語の意味や、「景観」などの類義語への考察に関する初出のものである。

「そもそも風景とは何であるか、風景は景色、または風光ともいはいはれ、近頃我が博物學者の間では、景観といふ新語も流布しつつある。すべて英語のランツスケープである。」

また、「風景」概念に関する記述もなされており、「風景とは、山水、風物の目に見えるさまである。人がある點に立つ時に、双眸に収められる限りのパノラマ的な地貌が風景である。従つて、風景は物と人との関係によつて起る現象であつて、人を中心として考へれば、明らかに心的事実である。されば風景は人の心次第である。同じ風景も、人によつて變るともいへる。」のように、風景を主体と対象の相互関係における現象と理解し、視点を重視するという従前からの田村の風景概念が明確に示されている。加えて、自然領域に適合され、「風景」と「景色」、「風光」、「地貌」が同義語であることが明記されている。

さらに「眼に見える風景は、これを更に分類して観察するのが便宜である。その分類のためには……後略」とあるように、風景を分類する型式は、物理的実在ではなく、主体によって知覚なされた「風景」を分類するということが示されている。

国立公園ノ選定ニ関スル方針

国立公園ハ一定ノ標準ニ照シテ嚴選シ努メテ其ノ濫設ヲ戒ムベキハ勿論ナリト雖苟モ国立公園トシテノ条件ヲ具備スル箇所ニ付キテハ仮令財政等ノ都合ニ依リ直チニ其ノ公園施設ニ着手シ難キ事情アル場合ニ在リテモ尚之ガ指定ヲ為シ先ヅ以テ其ノ風景ノ保護ニ遺憾ナキヲ期スルト共ニ須ク其ノ公園計畫ヲ樹テテ官民ノ抱ルベキ所ヲ示スノ要アリ其ノ選定基準ハ左ノ如ク之ヲ定メ必要条件ヲ具備スル箇所ニシテ成ル可ク多分ニ副次条件ヲ満足セシムルモノヲ採択スルヲ以テ適當ナリト認ム

第一、必要条件

我が國ノ風景ヲ代表スルニ足ル自然ノ大風景地タルコト

即チ國民的興味ヲ繋グ得テ探勝者ニ對シテハ日常体験シ難キ感激ヲ与フルガ如キ傑出シタル大風景ニシテ海外ニ對シテモ誇示スルニ足り世界ノ觀光客ヲ誘致スルノ魅力ヲ有スルモノタルコト

上述ノ条件ニ適合スルモノトシテハ左記ニ該當スルモノタルベシ

- (一) 同一形式ノ風景ヲ代表シテ傑出セルコト
- (二) 自然的風景地ニシテ其ノ区域広大ナルコト
- (三) 地形地貌ガ雄大ナル力或ハ風景ガ變化ニ富ミテ美ナルコト

第二、副次条件

- (一) 自然的素質ガ保健的ニシテ多数人ノ利用ニ適スルモノナルコト

即チ空氣、日光、氣候、土地、水等ノ自然的素質ガ保健的ニシテ多数人ノ登山、探勝、散策、釣魚、溫泉浴、野營、宿泊等ノ利用ニ適スルコト

- (二) 神社仏閣、史跡、天然記念物、自然現象等教化上ノ資料ニ豊富ナルコト

即チ神社仏閣、史跡、伝説等豊カニシテ地質、植物、動物、氣象等自然物又ハ自然現象ニ關シテ稀有ナル種類又ハ珍奇ナル現象ニ富メルコト

- (三) 土地所有關係ガ公園設置ニ便宜ナルコト

即チ区域内ノ土地ハ御料地、國有地、公有地、社寺有地等ヲ主トシ私有地ヲ包含スル場合ニ在リテハ成ル可ク土地所有者ガ國立公園ニ對シ理解ヲ有シ其ノ設置ニ付便益多キコト

- (四) 位置ガ公衆ノ利用上有利ナルコト

即チ成ル可ク交通便利ニシテ且全國的分布ノ當ヲ得タル位置ニ存スルコト

- (五) 水力電気、農業、林業、牧畜、水産、鉱業等各種産業ト風致トノ抵触少キコト

- (六) 既設ノ公園域施設ガ國立公園計畫上有効ニ利用セラルルモノナルト共ニ将来ノ開發容易ニシテ國立公園事業ノ執行上便益多キコト

図-4 『国立公園選定ニ関スル方針』

その2年後の1934年の『風景地の研究と風景術の提唱』⁸²⁾では、田村の言説は若干深化し、「風景」「風景地」「景観」といった用語の区別が明示されている。

「物と人との相關的現象たる「風景」を取扱ふよりも、優れた「風景」を有する土地たる「風景地」または景勝地…後略」とあるように、「風景」を主体と対象間に生まれる現象であり、その風景が生成される物理的な空間を「風景地」として、その2語の明確な区別を示す。そして、この「風景地」の理解に対しては地質学、生物学をはじめ、現在の人文地理学のアプローチ⁸³⁾が必要であることを認める。この場合において「風景地」と「景観」は類似のものとするを妥当であるとする。そして、美的現象を表す「風景」に対して、より「科学的」な態度を取る場合には「景観」という用語が使用されることを妥当とする。

そして、1935年の『風景論考』^{84)~86)}においては「風景とは何であるか、風景の概念を開明することは、風景研究に志す者の最初に片付けなくてはならぬ筈の問題である。風景は判り切つてゐるようで、その概念を追求する段になると曖昧なものになつて仕舞ふ。多少の文献を漁つて見ても。これといふものにまだ出くはさない」

として、「風景」概念に関する考察がなされる。そこでは語源や

図－5 1930年代の田村の風景概念図

図－6 田村の示す「風景」と「風景地、景観」

類義語等に関する考察がなされ、英語においては「風景」は“landscape”に対応することを当然とする。そして、「地表に於ける（水陸空三界に跨る）種々の物象の総合して目に映ずる趣きある有様を風景といふ」として風景の定義を示し、やはり風景を「美的な現象」であり、「繪畫的な効果を伴ふ」とする。また、主体の視覚だけでなく、五感による知覚、心理的影響からの風景評価の変化を論じる。

さらに、「風景」が視点の変化によって生まれる風景群を示すかどうか、時間の変化によって生まれる風景群というような、後の景観工学による分類における「シーケンス景観」⁴²⁾に相当するものを含むのかどうかに関して検討される。そして特定の視点、瞬間的に生まれる風景だけでなく、こういった変化のある風景群も、「風景」に含まれると結論付けている（図－5 参考）。

また、「景観」を植物学者や地理学者によって使用される流行の用語であるとし、“physiognomie/ 観相”を示すものであるとする。そして、景観を「科学的観察」に基づくもので、「主観的」でなく、「普遍的性質」なものであるとし、人間に生じる美的な現象であり、「芸術的な見方」をする「風景」との区別を行う。しかし、英語の“landscape”には2つの解釈があるとし、「主体と対象間に生じる眺め」と「その眺めが生じる土地」を示す。そして、前者を「風景」に、後者を「風景地」に対応させる。そして、この「風景地」という具体的な土地を対象にする場合は、「景観」と同様のアプローチをとる必要性を示している（図－6 参考）。

このように、「科学的」な「景観」に対して「風景」を「芸術的な見方」をするということを明確に示すが、その風景を構成する要素そのものに対しては「地理、地質、植物、動物、気象等の景観の研究が補助知識」とあるように、科学的な観察に基づくものである。その上で、その風景要素の色彩や形態が、主体に対して及ぼすある一定の共通的な知覚に関して記述される⁸⁷⁾。そして、それらを総合的に見るための視点や、その風景要素や総体の操作に関する記述がなされる。中でも視点に関しては、視点の高さや角度が重視される。また、風景の型式に関しての以下のような記述もされており、

「ある種の風景地に関してはそこに共通点を発見して、これを類化し、一つの風風（ママ）の型式といふものを観念するに至るであらう。それは類似した風景を重ね焼きして出来た写真を見るや

うなものである。かくして風景の分類も生まれて来る理である」とされ、風景の型式に関しては、「ある特定の視点からの対象を眺めた時に生じる現象」である風景から類型化することが明確に示される。

（3）田村剛の風景概念と国立公園の指定

このように、1932年以降、田村の風景概念と用語の使い分けが示される論考が現れ、1934年には田村が風景概念と景観概念を明確に区別し、用語を使い分けていく様子が窺える。その経緯を国立公園の指定の過程と併せて検討したい。

国立公園の選定は、1930年から1932年にかけて基本的に『国立公園ノ選定ニ関スル方針』に沿って行われた。即ち、「我が国ノ風景ヲ代表スルニ足ル自然ノ大風景地タルコト」がその根本基準である。そして、これまでの田村の主張を鑑みれば、ここで示される「風景」とは、現象としての風景であり、“特定の視点を持つ視覚像”であると考えられる。

また、田村が提示した選定の際の1つの基準となる「風景型式」に関しても、それは従来考えられてきたような地理学的の景観概念とは異なり、人間主体の視覚像が最終的な分類対象となっている。

加えて、選定委員会では、三好学（植物学）による「吉野群山付近ノ景色ハ他ハナイ」「雲仙ホド眺望ガヨク」などの発言や、脇水鉄五郎（地質学）の「水成岩壺流トシテハ大台ヶ原大峯山以外に新高山、南アルプスガアルガ、風景トシテハ大台ヶ原大峯山ノ方ガヨイ」との発言⁸⁸⁾が確認出来るように、彼らも現象としての風景を国立公園の選定の基準としていることが判明する。

このように、国立公園の指定においては、基本的に現象としての風景が基準となっていたと考えられる。それは田村だけのものではなく、他分野の学識者にも共有されているものであった。

同時にここにおいて、現象としての風景を評価する困難性が浮かび上がった。田村は風景が主体による属する美的現象であることを認めながらも、主体によって生じる風景の評価の差異は、知覚主体の能力に求めている。そして、真正性のある「正しい」ものの存在を前提とし、それらは学術的に査定することが可能としていた。しかしながら、国立公園の指定においては、学問・学者ごとに現象としての風景の評価の相違が顕著であることが判明し、そのことは、国立公園の選定の作業に関しても難航させる要因ともなった。

こういった国立公園の指定の際の、現象としての風景を巡った相違と、それを制度としての評価することの限界が、田村の「風景」と「景観」の概念や用語の明確な区別に繋がっていったと考えられる。

（4）小括

1930年代は国立公園の成立期にあたり、その指定の際に田村には制度として風景の評価を行うことが求められた。

田村の風景への理解に関しては、従前のものと変わらず風景認識主体が、物理的実在を知覚した際に生じる美的現象として認識していた。そして、1932年の段階では、これを指し示す用語として、「風景」だけでなく、「景観」などが存在することが示され、この時点において「風景」と「景観」は同義語として扱われた。

しかし、1934年以降には、「風景」が美的現象を示す用語であるとされる一方で、「景観」は物理的実在を科学的に表す用語であると示されるように、これらの概念と用語の区別の明確化が行われた。この要因としては、国立公園の指定における、現象としての風景を巡った混乱と限界が考えられる。

7. おわりに

以上、国立公園法制定の前後である期間に焦点を当て、田村剛が使用する「風景」や「景観」といった用語の用法や概念や、1930年代の最初の国立公園指定の際の評価基準に関して検討を行った。

図－7 田村の風景概念と用語の区別

本稿の成果は以下にまとめられる。

1. 初期の論考より一貫して、田村の示す「風景」という用語は自然領域に使用されている。
2. 田村の風景への基本的理解は、風景認識主体が、物理的実在を知覚した際に生じる美的現象として捉えている。このうち、最も重視されるものは、特定の視点から対象を眺めた時に生じる視覚像である。
3. こういった風景概念に対して使用される用語は、「風景」だけでなく、「風致」「景」「景觀」「美観」「観」「地貌」「景色」「壮観」「大観」「風光」「光景」「風趣」「景勝」「景趣」「風貌」「勝景」「風情」が確認された。しかし、造園学の重要な概念でありながら、1932年以前の論考では、その概念や用語の用法に関する論考は存在せず、その定義も曖昧であった。
4. これらの用語のうち最も使用されたものは「風景」であることを定量的に示した。その結果、281稿中「風景」は181稿に使用されており、一貫して優先されて使用されている。また、1934年以前には、眺めを表す場合にも「景觀」が使用されており、「風景」との明確な違いは確認出来ない。
5. 1930年から1932年に行われた国立公園の選定は、こういった田村の風景概念を基本として、現象としての風景を価値基準として行われた。その際に田村により提示された「風景型式」も現象としての風景の分類を行っている。
6. 1934年以降、「風景」と「景觀」の違いに関して明確な違いが示された。「風景」を美的な現象を表すものとし、「景觀」は物理的実在を科学的に表す用語であるとされている。
7. こういった田村の風景概念の明確化には、1930年から1932年に行われた国立公園の指定における、現象としての風景を評価する際に生じた混乱と限界が大きな影響があると考えられる。
8. これらを整理したものを図－7に示す。

このように田村の風景概念が、国立公園を中心とした社会状況の変化に対応して整理されていく過程を明らかにしてきた。

本稿では、1910年代から1930年代におけるの事象を検討してきたが、1948年の『国立公園選定標準』、1952年の『自然公園選定要領』においては「景觀」という用語の用例が確認出来る。既に戦後の国立公園における風景評価の多様化は指摘されているが、戦後の田村の風景概念や用語の用法に関しては改めての研究課題としたい。

少なくとも当初の国立公園は風景概念をもとに人間の知覚（視覚を最重要視するが）を重視した制度設計がなされていた。現在、

国立公園の果たす役割が多様化する中で、国立公園にどのように向き合うかが造園学に求められるだろうと考える。

表－4 収集した論考

題名	巻数	風景	風致	景	景觀	美観	観	地貌	景色	壯観
農業世界										
1916 世界に於ける日本式庭園の位置	11(5)									
1918 東西南京に著名なる歴史的庭園(上)	13(4)									
1918 東西南京に著名なる歴史的庭園(下)	13(5)									
1918 農村公園 其理想と設計	12(12)									
1920 農家の庭園	15(8)									
1920 日本海に浮ぶ理想農園非斐島の経営	15(14)									
1921 郷土風景保存の急務	16(2)									
1921 庭園學上より見た櫻の價值	16(5)									
1922 時代の要求する公有林	17(2)									
大日本山林會報										
1916 林業芸術論	402									
1916 造園術ト林學	403									
1916 出雲大社ト造園ノ起源	404									
1916 風致木ノ刈込ト傷害樹ノ手當法	405									
1916 金剛山と其風景開發策	406									
1917 片山隆三氏に答へて	410									
1917 造園の起源と藝術としての造園	413									
1917 建築的造園の眞髓	414									
1917 植物觀相學を應用したる自然式造園に就	418									
1917 風景美と造園美と人工林の美	419									
1918 府縣立公園と郷土風景の保存	429									
1919 森林公園	440									
1919 森林公園 (承前)	441									
1920 造園美としての自然と人工	446									
1920 現代文明を背景として見たる造園	450									
1920 記念としての樹樹と造園	451									
1920 公園設計に關する豫防調査に就て	457									
1921 明日の林業と林學	468									
1922 森林の「第三利用」に就て	471									
1922 風致林の更新並に其の經濟的利用	476									
1922 風致林の更新並に其の經濟的利用	477									
1923 現代都市と森林との關係に就て	482									
1924 森林の文化的利用と土地の保留	505									
1925 森林の文化的利用の趨勢と森林政策に就	506									
1925 森林休養資源に就いて	511									
1925 合衆國々々林の休養施設と我國の	513									
1925 『風致工學』と林學に就て	516									
1926 海外に於ける國立公園の沿革と其本質	520									
1926 海外に於ける國立公園の沿革と其本質	521									
1926 海外に於ける國立公園の沿革と其本質	522									
1926 海外に於ける國立公園の沿革と其本質	523									
1927 野外休養と森林	530									
1927 北米夏の夕	536									
1927 登山と風景觀の革命	537									
1928 森林の風致的施業法	542									
庭園										
1918 庭園偶感	1(1)									
1918 主張 我が造園界の改造	1(2)									
1919 主張 公園の時代化	2(1)									
1919 主張 日本庭園の前途	2(2)									
1919 主張 住宅を有せよ	2(3)									
1919 桃山時代の庭園	2(3)									
1919 主張 因襲を去れ	2(4)									
1919 主張 簡易別荘	2(7)									
1919 主張 水を生動せしめよ	2(8)									
1919 主張 郊外生活の真意義	2(9)									
1919 主張 新時代の作動	2(10)									
1919 茶道と茶庭の外観	2(10)									
1919 主張 子供本位の庭園	2(11)									
1919 主張 成長しつつある音楽	2(12)									
1920 主張 名園の保存に就て	3(1)									
1920 吉水亭の記	3(1)									

年号	題名	巻数	風景	風致	景	景觀	美観	観	地貌	景色	壮観
1920	主張 國立公園の要望	3(2)	○								
1920	國立公園の本質	3(2)	○	○							
1920	主張 花壇の趣味	3(3)									
1920	主張 庭木業者に望む	3(4)									
1920	主張 民衆と庭園	3(5)									
1920	時代の要求する小庭園	3(5)	○								
1920	主張 将来の遊園地に対する希望	3(6)	○								
1920	主張 名勝地に盛衰あり	3(7)	○	○							
1920	主張 山岳風景国に望む	3(8)	○	○							
1920	主張 庭園建設物の改善	3(9)									
1920	飛騨高山の名園巡り(上)	3(10)									
1920	飛騨高山の名園巡り(下)	3(11)									
1921	京都室町時代の庭園	4(1)	○								
1921	質実な独逸の庭園	4(3)									
1921	新庭園試作	4(6)									
1921	天然生活と庭園	4(7)									
1922	庭園改善の真相	5(1)									
1922	朝鮮の庭園	5(2)									
1923	北米/パンフ 國立公園より	6(1)	○								
1923	羅馬の庭園を見て	6(6)									
1923	フラスチカより	6(7)	○								
1924	最近欧米各国に於ける造園界	7(1)	○	○	○					○	
1924	國立公園を実現せしむる方策	7(3)	○								
1924	夜の造園問題	7(7)									
1924	造園術の経験	7(9)									
1924	田舎のあるお医者さんの庭	7(12)									
1925	庭園の設計、築造依頼者に対する希望	8(1)									
1925	近代庭園講話 (第一回)	8(3)	○								
1925	和風庭園洋化の傾向	8(4)	○		○						
1925	近代庭園講話 (第二講)	8(4)	○								
1925	新人を迎える辞	8(5)									
1925	近代庭園講話 (第三講)	8(5)									
1925	秩父の近代的発見	8(6)	○								
1925	近代庭園講話 (第四講)	8(7)	○		○					○	
1925	新傾向の庭園と庭木	8(9)	○					○			
1925	外苑の様式と細部に就いて	8(10)			○					○	
1925	近代庭園講話 (第五講)	8(11)									
1925	ドイツの庭園二つ	8(11)									
1925	支那庭園の石組み法	8(12)	○		○						
庭園と風景											
1926	風景地の計画と経営(第一講)	9(1)	○	○				○			
1926	風景地の計画と経営(第二講)	9(2)	○								
1926	風景地の計画と経営(第三講)	9(3)	○	○							
1926	風景地の計画と経営(第四講)	9(5)	○	○							
1926	風景地の計画と経営(第五講)	9(6)	○	○	○						
1926	風景政策上より見たる 國立公園問題	9(8)	○								
1926	風景地の計画と経営(第六講)	9(10)	○		○						
1926	風景地の計画と経営(第八講)	9(11)	○	○							
1926	風景地の計画と経営(第七講)	10(1)	○								
1927	造園教育私見	10(1)	○	○							
1927	造園の宣伝	10(2)									
1927	造園家の社会的領域	10(3)	○								
1927	林本源の庭園-台湾紀行の一節-	10(8)									
1928	造園洋書解題	11(1)	○								
1928	造園学修法	11(3)	○								
1930	庭木及庭石業者に望む	13(3)									
1930	國立公園法の誕生を祝す	13(4)									
1930	欧米より何を学べるか	13(5)									
1930	石燈籠用法の吟味	13(5)	○								
1930	國立公園法に就いて	13(5)	○								
1930	青葉の感想	13(6)									
1930	冷夏と造園	13(7)									
1930	北海道の印象	13(8)	○			○					
1930	造園技術と機械の応用	13(10)									
1931	庭木及庭石業者に望む	13(3)									
1931	國立公園法の誕生を祝す	13(4)									
1931	欧米より何を学べるか	13(5)									
1931	石燈籠用法の吟味	13(5)	○								
1931	國立公園法に就いて	13(5)	○								
1931	青葉の感想	13(6)									
1931	冷夏と造園	13(7)									
1931	北海道の印象	13(8)	○			○					
1931	造園技術と機械の応用	13(10)									
1932	欧州に於ける城址公園	14(2)									
1932	石の趣味	14(9)			○						
1932	屋上庭園の設計図案を見て	14(9)									○
1932	國立公園の誕生に當りて	14(11)	○								
1933	造園学の発祥と造園教育の発達	15(3)									
1933	東京の庭園と京都の庭園	15(4)						○			
1933	欧米造園界最近の動向	15(9)									
1933	アメリカの國立公園より何を学ぶ	15(9)									
1934	近代庭園と花木	16(3)	○								
1934	別荘庭園の意匠	16(7,8)	○	○	○	○	○				
1934	ホテルと旅館の庭園	16(9)									
1934	関西地方の風水害所感	16(11)									
1935	日本庭園の海外紹介	17(1)									
1935	米國庭園倶楽部を迎ふるの辭	17(5)	○								
1935	日本庭園協会の飛躍を期せ	17(6)									
1935	日本庭園の眞實	17(6)									
1935	西洋庭園講座 親しまれる西洋庭	17(11)	○								
1935	冬庭偶感	17(12)									
1936	西洋庭園講座 一 洋風庭園の構成	18(1)	○		○	○					
1936	廣場雜感	18(3)						○			

年号	題名	巻数	風景	風致	景	景觀	美観	観	地貌	景色	壮観
1936	支那庭園の再検討	18(9)	○								
1936	「日本庭園観」紹介の言葉	18(11)									
1937	庭園の公開	19(2)									
1937	蓬萊園を惜む	19(4)									
1937	静岡の名園	19(7)									
1937	神宮外苑改造に就て	19(8)					○				
1937	東洋藝術庭園の宣揚	19(12)									
国立公園											
1929	国立公園の事業と経済問題	(1)1	○	○							
1929	冬の国立公園	(1)1	○					○			
1929	国立公園と遊覧系統	(1)3	○								
1929	海外国立公園巡り (1) ホット・スプリ	(1)4									
1929	国立公園の経費問題	(1)5	○						○		
1929	上高地	(1)6	○								
1929	白馬岳	(1)6	○								
1929	阿蘇	(1)6	○						○		
1929	国立公園の条件より見たる我候補地大観	(1)8	○								
1929	海外国立公園巡り (3) 「ハワイ国立公	(1)8							○		
1929	黒部溪谷を救へ	(1)9	○								
1929	アメリカ合衆国新設国立公園: グランド・	(1)9	○								
1929	大風景地の保護と開発	(1)10	○								
1930	黒部溪谷の風景	(2)1	○	○		○	○	○			
1930	カナダ国立公園と其の近況	(2)2	○						○		
1930	アメリカ合衆国前国立公園局長メーサー	(2)4	○								
1930	中華民国に於ける国立公園運動「国立大	(2)5	○								
1930	海外国立公園巡り(4)「イエローストーン	(2)5	○								○
1930	奥靜の奇勝危し	(2)6	○		○	○					
1930	国立公園の選定	(2)8	○								
1930	アメリカの新設国立公園 (グレートス	(2)8	○								
1930	カナダ国立公園の近況	(2)10									
1930	耶馬溪小論	(2)11	○		○						○
1931	国立公園と造園技師の活動 (1)	(3)1	○			○					
1931	国立公園と造園技師の活動 (2)	(3)2	○						○	○	
1931	国立公園と造園技師の活動 (3)	(3)5	○							○	
1931	国民の遺産としての国立公園	(3)8	○								
1931	イギリスに於ける国立公園運動	(3)8	○								
1932	タロコ峽	(4)6	○			○			○		○
1932	国立公園の指定に先ちて	(4)8									
1932	国立公園の誕生	(4)11									
1932	地元官民の警戒を望む	(4)12	○	○							
1933	国立公園に関する23の所感	(5)1	○	○					○		
1933	国立公園を語る (1) 日光	(5)2	○		○	○	○		○		○
1933	南国の国立公園を巡りて	(5)4						○		○	
1933	我が国立公園に関する障害と対策	(5)8	○								
1933	北海道短信	(5)9	○								
1934	我国最初の国立公園	(6)1	○	○		○	○		○		○
1934	審査所感	(6)3	○	○							
1934	国立公園の指定に当りて所感を述ぶ	(6)4	○								
1934	国立公園の利用施設に必要な土地に就	(6)6	○	○							
1934	十和田紀行	(6)7	○			○					
1934	新に指定せられた五大国立公園	(6)12	○	○		○		○			
1935	冬の国立公園	(7)2	○								○
1935	日本人の風景観と国立公園	(7)6	○								
1935	朝鮮及満洲に国立公園の設置を望む	(7)9	○	○							
1935	巻頭言「国立公園の夕」開会挨拶	(7)11	○								
1935	レニアの石使節を迎ふ	(7)12									
1936	国立公園協会任務の革新	(8)1	○	○							
1936	十和田,富士箱根,吉野熊野,大山国立公園	(8)3	○	○		○					
1936	我が国国立公園の沿革	(8)4									
1936	北米合衆国州立公園の概観 (其1)	(8)5	○	○							
1936	国立公園の恩人 大島辰次郎氏を悼む	(8)5									
1936	北米合衆国州立公園の概観 (其2)	(8)6	○								
1936	北米合衆国国立公園の概要 (其3)	(8)7	○	○							
1937	府県立公園の現況	(9)1	○								
1937	アメリカ合衆国国立公園近況	(9)2	○	○							
1937	松村辰喜君を悼む	(9)2									
造園研究											
1931	ガンペーヤヤ荘	1			○						
1932	我国に於ける造園学の発祥	4	○	○	○						
1932	造園と土地計画	6	○						○		
1934	庭園意匠の特質性質に就て	10	○		○			○			
1936	日本庭園に於ける平庭の意匠	17	○								
1937	後楽園の意匠	25						○			
1941	熱河離宮の庭園	35		○	○	○	○		○		
武蔵野											
1919	江戸の庭園	2(2)			○						
1920	滅ばされた江戸の名園	3(3)			○						
1922	大東京と武蔵野	5(1)	○			○					
1922	公園系統と向島	5(2)		○	○		○				
1926	我が造園学の位置とその将来に就	2(1)									
風景											
1934	風景地の研究と風景術の提唱	1(1)	○	○		○					
1934	ターホー湖	1(2)									
1934	観光威伊豆	1(3)	○		○						
1935	郷土風景と其の保存の急務	2(3)	○			○					
1935	観光地としての大島	2(8)									
1935	風景論考 (一)	2(10)	○	○		○				○	
1935	風景論考 (二)	2(11)	○							○	
1935	風景論考 (三)	2(12)									
1936	日本風景と国立公園	3(5)	○	○		○	○	○		○	
1936	観光地としての土佐	3(7)	○			○		○			
1936	諏訪湖と霧ヶ峰	3(8)									
1936	隈れたる勝地-魚島と種差	3(9)	○			○					

[illegible]

謝辞：本研究は JSPS 科研費特別研究員奨励費の助成を受けたものです。

補注及び引用文献

- 1) 環境省 (2008) : 国立公園の仕組み 美しい日本の自然とその継承 - 環境省, 2 「自然公園法での保護対象は自然の風景地であり, 自然環境保全や生物多様性保全とは厳密には概念が異なる。ただし, 人が感じる風景とは, 視覚だけでなく五感で感じるものまでが含まれており, 自然を包括的に認識すること」
- 2) 国立・国定公園の指定及び管理運営に関する検討会 (2007) : 国立・国定公園の指定及び管理運営に関する提言 一時代に応える自然公園を求めて - 環境省, 10 「景観の評価には, 受け手である「人の感じ方」の評価が重要」
- 3) 小野良平 (2008) : 三好学による用語「景観」の意味及び導入意図 : ランドスケープ研究 71(5), 433-438
- 4) 小野良平 (2008) : 森林風景計画法 : 現代林学講義 8 : 地球社, 115-154
- 5) 荒山直彦・大城直樹編 (1998) : 空間から場所へ - 地理学的想像力の探究 : 古今書院, 90-91
- 6) 神田孝治 (2011) : 日本統治期台湾における国立公園の風景地選定と心象地理 : 歴史地理学 53(3), 1-27
- 7) 荒山直彦・大城直樹編 (1998) : 空間から場所へ - 地理学的想像力の探究 : 古今書院, 90-91
- 8) 篠原修編 (1998) : 景観用語辞典 : 彰国社, 16-27
- 9) しかし, 人間が知覚するという現象であるという特性を持つ以上, 物理的なモノ単体で存在することはありえず, 「風景」と「景観」を厳密な意味で区別することは難しく指摘がなされている。西田正憲 (2012) : 自然の風景論—自然をめぐるまなざしと表象 : アサヒエコブックス, 154-155
- 10) 小野良平 (2008) : 森林風景計画法 : 現代林学講義 8 : 地球社, 134
- 11) 西田正憲 (2012) : 自然の風景論—自然をめぐるまなざしと表象 : アサヒエコブックス, 172, 354
- 12) 岡野隆宏 (2013) : わが国最初の国立公園選定の際の風景評価 : ランドスケープ研究 (オンライン論文集 (6)), 18-24
- 13) 堀繁 (1993) : わが国の国立公園の計画管理の実態とその変遷に関する研究 (1) : 東京大学農学部演習林報告 (90), 97-182
- 14) 西田正憲 (1997) : 瀬戸内海における多島海景変遷と脇水鉄五郎・田村剛の視覚 : ランドスケープ研究 60(5), 425-430
- 15) 小野芳樹 (2010) : 瀬戸内海国立公園・下津井と牛窓の風景準備 : ランドスケープ研究 73(5), 381-384
- 16) 計画レベルにおいて, 2つの概念が使い分けられていたと指摘することも可能ではある。
- 17) 小野良平 (2008) : 三好学による用語「景観」の意味及び導入意図 : ランドスケープ研究 71(5), 433-438
- 18) 黒田乃生・小野良平 (2004) : 明治末から昭和初期における史蹟名勝天然記念物保存にみる「風景」の位置付けの変遷 : ランドスケープ研究 67(5), 597-600
- 19) 田中正大 (1981) : 日本の国立公園 自然保護と風景保護 : 相模書房, 284pp
- 20) 堀繁 (1993) : わが国の国立公園の計画管理の実態とその変遷に関する研究 (1) : 東京大学農学部演習林報告 (90), 97-182
- 21) 依造三 (2003) : 日本の造園学と国立公園を生み育てた二人の先覚者 - 田村剛と上原敏二の対照的な造園観を探る : 国立公園 611, 16-21
- 22) 西田正憲 (1999) : 瀬戸内海の発見 : 中央公論新社, 263pp
- 23) 小野芳樹 (2010) : 瀬戸内海国立公園・下津井と牛窓の風景準備 : ランドスケープ研究 73(5), 381-384
- 24) 村中仁三郎 (2005) : 国立公園成立史の研究—開発と自然保護の確執を中心に : 法政大学出版局, 417pp
- 25) 水内佑輔・古谷勝則 (2014) : 大正期における田村剛の示す国立公園の風景とその変遷 : ランドスケープ研究 77(5), 413-418
- 26) 環境省 (2008) : 国立公園の仕組み 美しい日本の自然とその継承 - 環境省, 4-5
- 27) 市川秀和 (2001) : 大正期における田村剛のモダンデザイン思考と庭園改

普運動：ランドスケープ研究 64(5)：497-500

28) 清水裕子・伊藤精梧・川崎圭造 (2006)：戦前における「森林美学」から「風致施設」への展開：ランドスケープ研究 69(5)：395-400

29) 十代田朗・岸本史大・中野文彦 (2002)：田村剛による「公園計画」・「温泉地計画」の特徴に関する事例研究：ランドスケープ研究 65(5)：413-416

30) 小野芳明 (2013)：帝国の風景序説-城下町岡山における田村剛の風景利用：近代日本の歴史都市 古都と城下町：思文閣出版、479-513

31) 渡部章郎・進士五十八・山部能宜 (2010)：造園学分野および工学分野の景観概念の変遷東京農業大学農学集報 54(4)：300 においてわずかに田村の「風景」概念に関して触れられている。

32) 糸賀聖 (1986)：景観研究の系譜 (発展期)：造園雑誌 50(2)：118-122

33) 著作と論考では、その分量が大きく異なるが、本稿ではそれぞれ 1 稿として集計した。また、これらを併せて論考と表記する。

34) 眺め、評価の伴った眺めといった語と、それらと類義語と考えられる用語を抽出することとした。また「景」は単体で使用される場合と、接頭語や接尾語が含まれる場合も「景」として数えた。

35) 田村剛 (1918)：造園概論：成美堂出版、15

36) 田村剛 (1919)：庭園鑑賞法：成美堂出版、3

37) 1935 年の論考では、風景は自然空間のみに適合されることが明確に示されており、管見においてもその変化は確認出来ない。田村剛 (1935)：風景地の研究と風景術の提唱：風景、8

38) 各用語の出現頻度は考慮せず、一度でも現れた場合に 1 回と数えた。

39) 田村剛 (1917)：風景美と造園美と人工林の美：日本山林會報 419、

40) 田村剛 (1916)：林業芸術論：大日本山林會報 402、6-10

41) 田村剛 (1918)：造園概論：成美堂出版、124

42) エマーズンの原文では、The difference between landscape and landscape is small, but there is great difference in beholders. There is nothing so wonderful in any landscape as the necessity of being beautiful, under which every landscape.

43) 篠原修 (1982)：土木景観計画：新体系土木工学 59：技法堂出版、19-25

44) 田村剛 (1918)：造園概論：成美堂出版、123

45) 田村剛 (1918)：造園概論：成美堂出版、100

46) 田村剛 (1918)：造園概論：成美堂出版、68, 121, 152 田村剛 (1919)：庭園鑑賞法：成美堂出版、51, 60, 220 田村剛 (1919)：森林公園：大日本山林會報 440 田村剛 (1917)：森林公園：大日本山林會報 440 田村剛 (1917)：風景美と造園美と人工林の美：日本山林會報 419、ただし、この項は『造園概論』に収録されており、ほぼ同様のものとなっている。

47) 田村剛 (1918)：造園概論：成美堂出版、123

48) 田村剛 (1918)：造園概論：成美堂出版、124

49) 田村剛 (1918)：造園概論：成美堂出版、126

50) 田村剛 (1918)：造園概論：成美堂出版、12

51) 田村剛 (1918)：造園概論：成美堂出版、250-258

52) 田村剛 (1971)：造園と林学出身者：大正・昭和林業逸史・上巻：林業経済研究所、25

53) 水内佑輔・古谷勝則 (2014)：大正期における田村剛の示す国立公園の風景とその変遷：ランドスケープ研究 77(5)：413-418

54) 田村と同じく本多門下である中越延豊によって行われた。環境庁自然保護局編 (1981)：自然保護行政のあゆみ、53

55) 上原敏二 (1923)：国立公園の真意義：大日本山林會報 486、37-45

56) 上原敏二 (1924)：造園学汎論：林泉社、351-418

57) 田村剛編 (1951)：日本の国立公園：国立公園協会、28-29

58) 田村剛 (1927)：国立公園：内務省衛生局及び日本庭園協会、54pp

59) 厚生省国立公園部 (1948)：国立公園調査会設立ヨリ今委員会廃止ニ至ル迄ノ經過概要：国立公園審議会一般第 2 冊

60) 上原敏二 (1924)：造園学汎論：林泉社、465pp

61) ただし、本書の執筆にあたっては「造園を学術的に組織してを試みるもの」としながらも、「理論より実測という主旨」があったことが記載されており、このことが風景概念に関する論述がみられなかった要因としても考えられる。

62) 田村剛 (1929)：森林風景計画：成美堂書店、33

63) 田村剛 (1929)：森林風景計画：成美堂書店、40-41

64) 油井正昭 (1986)：景観研究の系譜 (胎頭期)：造園雑誌 50(2)

65) 田村剛 (1925)：合衆國々々有林の休養施設と我國の現状：大日本山林會報 513、23-31

66) 田村剛 (1927)：国立公園：内務省衛生局・庭園協会

67) 田村剛 (1928)：尾瀬の風景：尾瀬の景観：大日本山林会、1-22

68) 田村剛 (1929)：森林風景計画：成美堂書店、12

69) 田村剛 (1928)：尾瀬の風景：尾瀬の景観：大日本山林協会、11

70) 田村剛 (1926)：登山の話：文化生活研究会、136

71) 田村剛 (1928)：尾瀬の風景：尾瀬の景観：大日本山林会、

72) 田村剛 (1928)：台湾の風景：雄山閣、8、103、180

73) 田村剛 (1929)：森林風景計画：成美堂書店、70、100

74) 田村剛 (1929)：森林風景計画：成美堂書店、100

75) 田村剛 (1929)：森林風景計画：成美堂書店、63

76) 厚生省国立公園部 (1948)：国立公園調査会設立ヨリ今委員会廃止ニ至ル迄ノ經過概要：国立公園審議会一般第 2 冊

77) 例えば、田村剛 (1948)：国立公園講話：明治書院、52-60 田村剛編 (1951)：日本の国立公園：国立公園協会、30-34

78) 田村剛 (1948)：国立公園講話：明治書院、60 によれば海外の国立公園を比較対象に、日本に国立公園の特徴に関する議論が行われており、「壮大」な海外の国立公園の風景と比較し、「変化」や「優美」な日本の風景の特徴を国立公園にどのように反映させるかという議論が行われたのではないかと類推される。

79) 1930 年 12 月 15 日に第一回の会議が行われた後に、1931 年 6 月 8 日の第二回の開催までに時間が空くものの、この理由として第 59 回帝国国会、地方官会議のために特別委員会の開く時間的余裕がなかったと述べている。国立公園協会 (1931) 第三回国立公園調査給絵巻概況

80) 田村剛 (1932)：風景概観：科学書報叢書 11 風景の驚異：7 には「国立公園候補地 15 箇處中」とあり、この論考の執筆期間は特別委員会による議論期であると考えられる。

81) 田村剛 (1932)：風景概観：科学書報叢書 11 風景の驚異：2-9

82) 田村剛 (1934)：風景地の研究と風景術の提唱：風景 1(1)、8-10

83) 地理学、経済学、史学を例示している。

84) 田村剛 (1935)：風景論考 (一)：風景 2(10)、6-8

85) 田村剛 (1935)：風景論考 (二)：風景 2(11)、6-9

86) 田村剛 (1935)：風景論考 (三)：風景 2(12)、6-8

87) 田村剛 (1935)：風景論考 (三)：風景 2(12)、6-8

88) 特別委員会記事大要：国立公文書館所蔵『国立公園審議会一般』

(2014.4.28 受付, 2015.1.7 受理)